

『紫式部日記』三才女批評考

岡田，貴憲
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/7325738>

出版情報：語文研究. 136, pp.1-13, 2023-12-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『紫式部日記』三才女批評考

岡 田 貴 憲

『紫式部日記』の消息的部分における和泉式部・赤染衛門・清少納言への言及は、今日に名を残す三才女の一面を同時代の目から鋭くとらえた寸評として、従来強く注目されてきたところである。本稿の目的は、その三才女批評のうち和泉式部批評・清少納言批評にみられる解釈上の不審を正し、これまで赤染衛門批評のみに看取されてきた対比的批評の方法を、三才女批評を一貫する構造線として提示し直すこと、およびそれによって評者の通底する批評意識を浮かび上がらせることにある。

一 和泉式部批評

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。さ

れど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり。歌は、いとをかしきこと。もおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりゐたらむは、「いでや、さまで心は得じ。口にいと歌の詠まるるなめり」とぞ見えたるすぢにはべるかし。恥づかしげの歌詠みやおぼえはべらず。
(二〇一頁)^註

右の和泉式部批評は、中宮女房への批評に引き続いて中宮方と齋院方とを対照してきた前段の発端になったもの、すなわち前段の首尾に、「齋院に、中將の君といふ人はべるなりと

聞きはべる、たよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人のとりて見せはべりし」(一九三―一九四頁)、「いと御覽ぜさせまほしうはべりし文書きかな。人の隠しおきたりけるをぬすみて、みそかに見せて、とりかへしはべりにしかば、ねたうこそ」(二〇〇頁)と語られた、「中将の君」なる齋院女房による自賛毀他の手紙を縁として、今度は自らが興味深く文通した相手を引き合いに出したものと考えられる。批評の前半では手紙から垣間見られる和泉式部の文才を、そして傍線部「歌は、いとをかしきこと」以下からは歌才を評するが、いま着目したいのは後半の歌才評である。

ここで評者は、和泉式部の詠歌に必ず興趣の一点が備わっていることを長所として認めつつ、一方で他者詠に対する彼女の批評態度を通して、その長所が理論や知識に裏打ちされたものでなく、感性だけに頼ったものであることを的確に見抜いている。それらを総合して、立派な歌人だとは思われないうと断ずるのがこの寸評の結論となるのだが、注意を払うべきはその内容でなく、囲み線で示した「は」「だに」が表す構文にある。「ある事柄を特に取り立てて強調する意を表す。そこに他と区別し、他の事柄を排斥する気持ちがある」(『小学館古語大辞典』)と解説されるところの格助詞「は」を用いて提示された歌才が、「例外的、逆接的な事物、事態であるこ

とを示す」(同前) 副助詞「だに」を伴って否定的に語られるこの文章は、和泉式部の中で論評に値する唯一の点にさへ欠陥があることを示す構文と考えるべきで、それは裏を返せば、前半で評される文才が評者にとっては問題外であることの言表に他ならない。

ところが従来の解釈によれば、その前半部は以下のように訳出され、評者は和泉式部の歌才のみならず文才についても高い評価を与えたことになっている。

○和泉式部といふ人は、自分とはよく面白い手紙の交換をしたものである。和泉には怪しからん半面の生活はあるが、気軽にすら／＼と書き流す手紙には、その方面の才筆を思はせ、ちよつとした詞にも余韻を見せる人のやうである。
(『全釋』^注)

○和泉式部という人は、とても趣深く手紙のやりとりをした人です。――その実、和泉は不埒な一面をもっているのですが、何の気もおかずに手紙を走り書きしたときに、なにしろその方面の素養ある人だけに、ちよつとした言葉にもお色気があらわれるように思います。

(曾澤・森重『新釈』)

○和泉式部という人は、実に趣深く手紙をやりとりしたものです。しかし和泉には感心しない面があります。気軽

に手紙を走り書きした場合、その方面の才能のある人で、ちょっとした言葉にも色艶が見えるようです。

『新編全集』

これらの解釈は、「そのかたの才ある人」を和泉式部その人と見ること、およびその見方に齟齬を来す否定的文辞「されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」を和泉式部の文才でなく倫理面に対する評言と見ること、という二つの共通項によって支えられている。しかし、評者はなぜ文才に続けて歌才を賞賛するに「歌も」でなく「歌は」と述べたのか、という素朴な疑問に応えるものではなく、先述の「は」「だに」が表す構文との矛盾に対して、合理的に反駁する先行論も管見に及ばない。和泉式部批評における解釈上の不審はこの点に求められ、従来の解釈を支える二つの共通項について再検討の必要が生じる。

なお従来の解釈が支持されてきた背後には、早期の『紫式部日記』引用として知られる『無名抄』^(注3)「式部赤染勝劣事」が、「紫式部が日記トイフ物ヲミ侍シカバ、『泉式部ハケシカラヌカタコソアレド、ウチトケテフミハシリカキタルニ、ソノカタノザエアルカタモ、ハカナキコトノハノニホヒモミエ侍メリ。(中略)』トカケリ」と記している点も挙げられる。しかしこの引用自体が、現存伝本にみえない異文を留めたもので

はなく、引用者による読解を反映している可能性も大いに考えられる以上、これを正当性の根拠とすることは手続きとして順当でない。『無名抄』所引本文の価値判断は、むしろ『紫式部日記』の当該本文の解釈を踏まえてこそ行われるべきである。

二 赤染衛門批評

「そのかたの才ある人」についてまず押さえておくべきは、これを和泉式部その人と見る解釈が決して絶対ではないという点である。「(和泉式部は)そのかたの才ある人にて」のように捉える従来の解釈に対し、「(和泉式部と違い)そのかたの才ある人は」と捉える解釈もまた、文法上は問題なく成り立ち、両者の選択は直前の文脈によってのみ決定される。それを証するのが、和泉式部の歌才の好対照として展開される、赤染衛門批評である。

丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひはべる。ことにやむことなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌詠みとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをりふしのことも、それこそ恥づかしき口つきにはべれ。

ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み
出で、えもいはぬよしばみごとしても、われかしこに思
ひたる人、にくくもいとほしくもおぼえはべるわざなり。

(二〇一—二〇二頁)

前半で評者が、赤染衛門の歌才を最上位のものではないと
断りつつも、その詠歌姿勢を含めて存分に讀んでいることは、
和泉式部への総評をあらさまに意識した「それこそ恥づか
しき口つきにはべれ」との評言から明らかである。そうであ
る以上、後半に示された歌才の乏しく顕示欲ばかり強い人物
が、赤染衛門その人を指さないことは言うに及ばない。上下
句の分離しそうな腰折れ気味の歌を詠み、何とも言えぬ風流
気取りをして利口顔をしている悪しき人物例は、赤染衛門に
対比されるべく仮構されている。ここで重要なのは、このよ
うな理解があくまで赤染衛門をめぐる直前の文脈によつて導
かれており、傍線部「われかしこに思ひたる人」における人
物提示の方法は、和泉式部批評における「そのかたの才ある
人」とまったく同等という事実である。

このような類似にも拘わらず、「そのかたの才ある人」を和
泉式部に対比させようとする試みは、従来行われることがな
かった。その要因としては、これが今日著名な三才女への批
評であること、すなわち批評対象にまつわる周辺作品の伝来

することが大きい。「そのかたの才ある人」を和泉式部その人
と見る背景に、『和泉式部集』中の贈答歌の数々や、『和泉式
部日記(物語)』にみられる長大な手習文を含む敦道親王との
応酬、さらには同作品を和泉式部の作とする想定からも浮か
び上がる、文筆に秀でた才女像が想像されていることは、「そ
の恋愛経過は『和泉式部日記』に告白的に述べられ、贈答歌
が主軸をなしていることから、それを讀んで評したもの」^(注4)、
『文』のなかの『はかない言葉の、にほひ』を鋭く捉える感
性は、『和泉式部日記』の読後感に培われたもの^(注5)などの先論
に確と示されている。しかし『無名抄』の場合と同様に、そ
うした人物像との重なり具合は、当該本文の解釈が確定した
後にこそ測られるべきであつて、今日一般の評価を作品解釈
に投影することには、禁欲的でなければならない。

また、この問題に関連して、福家俊幸『紫式部日記』いわ
ゆる三才女批評の位相^(注6)は、赤染衛門批評の冒頭にみえる「匡
衡衛門」なる呼称について「赤染衛門には夫の影がいつも付
きまといつたことを暗示するこのあだ名は、赤染衛門が夫
の猟官活動に熱心であつたことへの揶揄がこめられていたの
ではあるまいか」と述べつつ、それが評者による皮肉を含ん
だ表現であるとの観点から、「方や男女関係に倫理的に軽率で
ある和泉式部と、方や夫に対して献身的でありながら、傍目

には行き過ぎのようにも思われる赤染衛門とを対比的にあらわした行文と解しうるであろう。これも、両者を比較しようという作者の目論みを裏付ける対偶的な構造と解されるのである」と指摘している。

福家論の前提には、三才女批評の中で「和泉式部評と赤染衛門評は一对のものとして表現されている」という見方がある。それは、さきの『無名抄』『式部赤染勝劣事』も引用する『俊頼髓脳』において、和泉式部と赤染衛門の優劣が論評される箇所に、「女流歌人の両翼として、一对で見る見方があったことの反映」を読み取るもので、この見解については肯われる。しかしながら、仮に「匡衡衛門」が揶揄による呼称であるとして、それが赤染衛門に対する直接の批判とまでは言えない一方で、「けしからぬ」が和泉式部に向けられた正面からの非難と読まれる点で、両者の差異はあまりに大きい。和泉式部批評と赤染衛門批評との間には、先述のように歌才をめぐる対照こそ認められるものの、両批評の全体が「対偶的な構造」にあるとする指摘には従いがたい。

和泉式部批評の従来の解釈にも、福家論の指摘するような、和泉式部は奔放だが天才的、赤染衛門はあざといが理知的、という対偶的な把握が働いていた可能性は考えられる。しかしそうした把握に右のような疑問が残るからには、和泉式部

批評の中にも赤染衛門批評と同等の対比構造を見出だす余地は、十分に認められてよい。むしろ、先述の歌才評の構文を念頭に置いたとき、「そのかたの才ある人」は和泉式部に対比される良き人物例としてこそ位置づけられるはずであって、それは和泉式部の文才を間接的に貶めた一文として理解し直すことができる。ここに至って問題は、従来の解釈を支えるいま一つの共通項である、否定的文辞「されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」の理解へと及ぶことになる。

三 再び和泉式部批評

「されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」の一文が持つ係り結びの構文については、従来の解釈の中に誤った理解をするものが散見するので、あらかじめ確認しておきたい。

係助詞「こそ」を已然形で受ける構文には、「已然形で続けられた前句と後句との関係が、意味的に逆接のもの」（『日本国語大辞典』）もあるが、逆接の辞「されど」に始まる当該文をそのように解釈すると、「和泉は、けしからぬかたこそあれ」は挿入句となり、その前後の文は「和泉式部とは興味深い文通をした。しかし、気軽に文を走り書きすると、その方面の才能がある人だが……」という「されど」の機能しない

不合理な文脈に陥る。

その処置として「されど」を省略する「和泉には怪しからん半面の生活はあるが」（『全釋』）のような訳文の存在は、「されど」が余計となるこの構文理解それ自体が誤りであることを示唆する。こうした不合理は、構文を「已然形で意味的に切れるもの」（『日本国語大辞典』）として理解し、一文を後文へ繋げないことで解消され、この一文は「しかし、和泉には『けしからぬかた』がある」と独立させて解釈するのが正しいと考えられる。

この「けしからぬかた」は従来、前掲福家論にも「男女関係に倫理的に軽率である」とあるように、和泉式部の倫理面に向けられた批判と受け止められ、時に「その歌人評にとつてはおそらく非本質的、挿入句的なもの」とされながらも「とかく不倫の世評の高かったその素行についていわれたものであることは間違いない」として、「紫式部のような良妻賢母主義の人から見た、和泉式部の自由奔放な恋愛人生をさす」（『全注釈』）のように広く理解されている。「非本質的」とされながらもそのような理解が行われている裏に、この否定的文辞を文才に絡めたとき「そのかたの才ある人」を和泉式部その人とする見方に齟齬が生じることへの回避が働いていることはまず予想されるが、加えてこの箇所にも周辺作品からの影

響が強く作用していることは、「為尊・敦道両親王との醜聞は広く世に知られていた」（『ソフィア文庫』）、「多くの男が彼女の家に出入し、殊に、為尊・敦道の兄弟の宮との関係が相ついでいることが、道長をして『浮かれ女』といわせた」（『鑑賞講座』）などの注記から明らかである。

無論この場合も、『和泉式部日記（物語）』『栄花物語』『赤染衛門集』『大鏡』から知られる為尊・敦道両親王との関係、『和泉式部集』に見え隠れする幾多の男性の影、あるいは藤原道長が「浮かれ女の扇」と書き付けた逸話などから想起される不埒な人物像を「けしからぬかた」へ早まって投影することとはやはり避けねばならない。先述のように、和泉式部批評の契機は齋院女房による自賛毀他の手紙を評者が掠め見たことにあり、その流れで「和泉式部との親交、その消息文について述べている時に、彼女の不行跡の批判を挿入する論理的必然性は何もない」（『臆説』）ことは、人物像を投影することの重大な欠点である。

このような従来の解釈に対して、山本利達「和泉はけしからぬかたこそあれ」は「伝説化された人物像に基づいて文章を理解することをさけて、文章に密着して読んでもなお素行に対する非難ということになるであろうか」と疑義を呈し、「けしからず」の用例をもとに、それが「素行や人柄に関して

のみ用いられる語でない」ことを論証する。同論がその上でなお『うちとけて文はしり書きたる』中に、魅力を感じさせる面をもっているという批評の進め方」と読み進む点には従えないものの、当該文に関しては「手紙の書きぶりについて『けしからぬかた』がある」とみるのが自然」とする立場に本稿も従う。

なお前掲福家論は、『けしからぬかたこそあれ』が和泉式部の手紙の書き方を指すとすれば、その通常とは異なる手紙の書き方とは、一体どのようなものか、もう一つ不分明であるように思われる」と指摘するが、「そのかたの才ある人」を和泉式部に対比される人物例と見たとき、「けしからぬかた」は自ずとその対極にあることが想定される。「うちとけて文はしり書」くことをせず、また「はかない言葉」を用いない和泉式部の文は、「おもしろう書きかはし」たとする内容面はともかく、形式的・表現的には仰々しい書きぶりであったことを思わせ、それを「けしからぬかた」と批判することは、赤染衛門の慎ましやかな詠歌姿勢を長所と見る評者の態度に符合する。

以上を要するに、和泉式部の文才評における「そのかたの才ある人」「されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」に対する従来の理解は、ともに批評対象にまつわる周辺作品から人

物像を投影するという、誤った手続きにより導かれたものと考えられ、前後の文脈を勘案することで、歌才評の構文から発した不審は取り除かれる。和泉式部の文才に問題があることを指摘したのち、唯一の取り柄とみなす歌才についても、なお欠陥の備わることを看破するというのが和泉式部批評の流れであって、その前半部では、赤染衛門批評にみられたのと同等の、仮構した人物例との対比という方法が用いられていると考えられる。そして両批評を貫くその対比構造が、続く清少納言批評においても解釈上の不審を正したときに現れてくるのではないか、というのが本稿の見通しである。

四 清少納言批評

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすぐすずなるをりも、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、い

かでかはよくはべらむ。

(二〇二頁)

赤染衛門批評において仮構された悪しき人物例「われかしこに思ひたる人」からの連想で展開される右の批評は、所謂「清紫」の比較という観点から長らく重視されてきたところであり、その内容を清少納言に対する一方的かつ極度に鋭い批判とするのがこれまでの共通認識である。その中でまず囲み線で示した「ば」の表す構文に着目したい。従来の解釈の多くは、この「ば」を順接の確定条件を表す接続助詞とみて、

このように人より特別に勝れようと思い、またそうふる
まいたがる人は、きつと後には見劣りがし、ゆくゆくは
悪くばかりなつてゆくものですから、いつも風流ぶつて
いてそれが身につけてしまった人は、まったく寂しくつ
まらないときでも、しみじみと感動しているようにふる
まい、興あることも見逃さないようにしているうちに、
しぜんとよくない浮薄な態度にもなるのでしよう。

(『新編全集』)

のように訳出しており、ここでは傍線部二箇所「人」がともに清少納言その人を指すとされている。しかし、順接の上下文において同一人物の話題が「人」の繰り返しで提示し直されることが、その実いかにも異様であることは、問題の接続助詞「ば」を正確に訳出しない、「行末よいわけは

なく、又趣味生活に耽溺する人は」(『全釋』)、「将来はうまくいかなくなる一方なのですが、風流がつて見せることになれてしまった人は」(『日本の文学古典編』)などの訳文が示すところである。

この問題を回避する立場としては、接続助詞「ば」を順接でなく並列の用法と解し、「近代語の『雨もふれば、風も吹く』のような『ば』の相形である。(中略)ここは、『かく人にことならんと思ひ好める人は……うたてのみはべる』し、『艶になりぬる人は……あだなるさまにもなるにはべる』の意」(曾澤・森重『新釈』)と説くものがまず挙げられるが、この用法は「二つの事態を対照的に表す。一方は……し、また一方は……する」(『小学館古語大辞典』)と解説されるように、同一人物の欠点を並記する表現としては不適切であり、「中世の用法」(同前)とされることから従えない。

あるいは別の立場として、「はべれば」とする校訂本文を斥け、「侍は」とある底本系本文を、「侍るは」と読んで、感動の終助詞で文が終止しているものと見るべき」(『全注釈』)とする見解があるが、その類例が『紫式部日記』中に見出だされない点からも、また、「将来碌なことはありませんよ。(また、こんな風に)気取る癖のつてしまった人は」(『全注釈』)と本文にない文辞の補いを要する点からも、説得力を欠く。

問題は「ば」の役割如何ではなく、同一人物の話題が「人」は「の」の繰り返しで提示し直されている、とする従来の文脈理解にこそあったと考えられ、解釈上の不審は、「かく」によって指示対象の明確な上文ではなく、下文傍線部「艶になりぬる人」を清少納言その人とする見方に求められる。

この「艶になりぬる人」以下の解釈について再び注意されるのは、そこに批評対象の周辺作品から作られた人物像が投影されている、という手続き上の瑕疵である。「清少納言への舌鋒の鋭さは、『枕草子』を丸ごと否定したいかのごとくである」(『ソフィア文庫』)、「枕草子やその筆者のあり方を巧みに一言でよくいい得ている」^(注9)などはその端的な言及で、とりわけ「をかしきことも見すぐさぬ」との一節に、『枕草子』における「をかし」を追尋する者としての清少納言像が投影されていることは、『枕草子』は「をかし」の文学であるが、『あはれ』も多く描いている。しかし、『枕草子』の中には、歌は極力除かれ、『をかしう』詠んだ歌のみが取り上げられた(『臆説』)のような注記が明白に示す。

しかしこうした人物像の投影を排除したとき、「艶になりぬる人」は、いとすこすこずるなるをりも、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬ」との一文は、決して従来言われるような一辺倒の批判とは解釈できないと考えられる。

梅野きみ子「紫式部の「えん」」^(注10)によれば、『紫式部日記』『源氏物語』にみえる「艶」の用法は「華麗性・好色性を肯定し、さらに(中略)『風流』を基調にしている」とされ、実際に『紫式部日記』における「艶なることどもをつくさむ中に、なにの奥なきいひすぐしをかはしはべらむ」(一九五頁)、「月をも見、花をもめづる、ひたぶるの艶なることは、おのづから」とめ、思ひてもいふらむ」(一九八頁)などの用例は肯定的に取られることが文意から確認される^(注11)。

他方、「風流を気取る」「風流ぶる」の意で否定的に用いられる「艶」が、「すべてさこそあらめと、人のためしにしつべき人がらなり。えんがりよしめくかたはなし」(一九〇～一九一頁)、「艶だち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住まひのさまなめりかし」(『源氏物語』夕顔・①一五六頁)^(注12)のように「艶がる」「艶だつ」の形で現れること、および「〜になりぬる」という表現が、「世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ」(同少女・③三四頁)、「誰も誰も御台まゐりなどして、のどかになりぬる昼つ方」(同夕霧・④四三二頁)のように単に「〜になった」の意で用いられることから、「艶になりぬる」は必ずしも「風流気取りが身についてしまった人」(『新大系』)、「風趣偏重に傾いてしまった人」^(注13)と否定的にのみ解すべき文辞でないことが知られる。

また、「むやみに情趣をふりかざし」(『大系』)、「しんみり感動しているように振舞い」(『集成』)と同じく否定的に解されている「もののあはれにすすみ」についても、「をかしきにすめる方なくともよかるべしと見えたるに」(同宿木・①六三頁)、^(金15)「いまめかしきにすすみたまへる御心なれば、いとしく艶なるに」(同宿木・⑤四一二頁)などの用法が示す「すすむ」の語義「物事がよい方に移る。上達する。進歩する。すぐれる」(『日本国語大辞典』)に照らして、「物事の情趣に通じ」と肯定的に解釈することが可能である。清少納言への鋭い批判という先入観抜きで捉えようと、一文全体の趣旨は、「人にぬきんでようと思うあまり、えんになりすぎ、もののあわれに進み、あだになつてしまふ、そういうタイプの女^(金15)」とは反対に、寒々しく趣に欠けた時節にも、物事の情趣に通じ、わずかな感興を見逃さない良き人物例を提示したもの、という理解が成り立つ。

この理解に従う場合、「おのづからさるまじくあだなるさまにもなる」のは、「艶になりぬる人」でなく、それに対比される「人にことならむと思ひこのめる人」であることが明快で、扱いの分かれていた「ば」の役割も、「おのづから……」に掛かる順接の確定条件を表す接続助詞と定まり、解釈上の不審が取り除かれる。「艶になりぬる人は……をかしきことも見す

ぐさぬ」を挟み込んだ全体の構文は、「風流をわきまえた人は何もない折にも興趣を見出している間に、個性的であろうとする人は本当の風流からかけ離れてゆくために、何も見出せない不都合で浮薄な状態へと落ちぶれる」ということを示しており、要するにこの一文は、「艶になりぬる人」という良き人物例との対比によって、清少納言の斜に構えた氣質を批判したものと考えられる。ここに認められるのが、和泉式部批評・赤染衛門批評に一貫するそれと同等の、人物例の仮構による対比の方法である。

五 三才女批評の通底意識

和泉式部批評と清少納言批評にみられる解釈上の不審を正すことで現れる、赤染衛門批評が備えるのと同等の対比的批評の方法は、人物対比の構造がこの三才女批評を確かに貫いていることを明らかにする。もとより三才女批評が、和泉式部に赤染衛門を対置し、かつ赤染衛門に清少納言を対置する表現形式であることを思えば、各人物にさらに対比されるべき人物例を仮構することもまた作為的な手法だったかと推測され、加えて前段の内容を想起するならば、それは中宮方と齋院方との対比から意識的に引き継がれてきた方法だったと

いう仮説もまた成り立つ可能性がある。

だがいまは、一貫した対比構造の認められる三才女批評の中に、通底する批評意識が見出だされることにこそ目を向けたい。その一端はすでに、和泉式部の文に対する「けしからぬかた」との批判が、赤染衛門の長所を認める評者の態度に符合する点として述べたところだが、この態度はさらに、赤染衛門に対する「歌詠みとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど」、そして清少納言に対する「さかしだち、真名書きちらしてはべる」「人にことならむと思ひこのめる」との評言とも照応している。

周囲の評価とは裏腹に、悦に入って下手な歌を詠み散らし、あるいは至らぬ漢詩文を書き散らすことで、常人とは異なる個性を発露しようとする、そうしたひねくれた気質を嫌う評者にとって、和泉式部の「けしからぬかた」、すなわち仰々しい手紙の書きぶりは、「人にことならむと思ひこのめる」清少納言に相通ずる行為だったと理解できる。もっとも評者にとって、そうした気質は単に嫌悪的であるよりむしろ哀れみの対象でもあり、「われかしこに思ひたる人」から連想された清少納言を、「あだになりぬる人」として「艶になりぬる人」に對比する心裏に、真の「あはれ」「をかし」を心得ないことへの憐憫の情も籠もっていたであろうことは、赤染衛門批評に

おける「にくくもいとほしくもおぼえはべる」との評言から推測される。

対して評者が好んだ人物の気質は、赤染衛門に対する「はかなきをりふしのことも、それこそ恥づかしき口つき」との評言から、和泉式部批評における「うちとけて文はしり書きたるに……はかない言葉の、にほひも見えはべる」、清少納言批評における「いとすごうするなるをりも、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬ」という、それぞれ対比された人物例への照応から導かれる。評者の批評眼に叶ったのは、理知的かつ自制的で、何気ない行為の中に機微に触れ、興趣を感じさせる人物であり、その気質は右に述べた悪しき気質のまさに対極に位置する。

三才女批評には、このように全体として整合性の取れた批評意識が通底しているのであって、本稿の示す一貫した対比構造を踏まえることでその文章上の照応が明確に現れ、それによって評者の内面を従来にまして深く掘り下げることが可能になると考えられる。ここにおいて、消息的部分の初めより展開されてきた中宮女房への批評とは明らかに異質な、とりわけ高い緊密度をもった一段として、この三才女批評を評することができよう。

冒頭で述べたように、『紫式部日記』の三才女批評はその批

評対象がいずれも今日に名を残す点で特徴的である。それ自体は状況として恵まれたことだが、むしろそれゆえに、周辺作品に由来する人物像が本作品の解釈にあらぬ影響を及ぼしてきたことは、縷説してきた通りである。見方を変えれば、和泉式部・赤染衛門・清少納言にまつわる周辺作品の解釈に際しても、本作品による人物批評が投影されている虞は無しとしない。その手続きの先後について、自覚的な立場からの再検証が求められる。

注

注1 『紫式部日記』本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠り、頁数を示す。ただし句読点・鉤括弧などの整定を私に施した箇所がある。

注2 本稿で引用する『紫式部日記』注釈書とその略称は以下の通り。
『全釋』…小室由三『紫式部日記全釋』（廣文堂書店、一九三〇年）／『鑑賞講座』…白田甚五郎・阿部秋生・清水文雄・松村誠一編『日本古典鑑賞講座王朝日記』（角川書店、一九五七年）／『大系』…池田亀鑑・秋山虔校注『日本古典文学大系 紫式部日記』（岩波書店、一九五八年）／曾澤・森重『新釈』…曾澤太吉・森重敏『紫式部日記新釈』（武蔵野書院、一九六四年）／『全注釈』…萩谷朴『紫式部日記全注釈 上巻・下巻』（角川書店、一九七一・一九七三年）／『集成』…山本利達校注『新潮日本古典集成 紫式部日記』（新潮社、一九八〇年）／『臆説』…白方勝『紫式部日記臆説』（風間書房、一九八六年）／『日

本の文学古典編』…古賀典子校注・訳『日本の文学古典編 紫式部日記』（ほるぷ出版、一九八七年）／『新大系』…伊藤博校注『新日本古典文学大系 紫式部日記』（岩波書店、一九八九年）／『新編全集』…中野幸一校注・訳『新編日本古典文学全集 紫式部日記』（小学館、一九九四年）／『ソフィア文庫』…山本淳子訳注『角川ソフィア文庫 紫式部日記』（角川学芸出版、二〇一〇年）

注3 引用は佐佐木信綱編『日本歌学大系 第参卷』（風間書房、一九五六年）に拠る。

注4 吉田幸一『和泉式部について——『紫式部日記』における和泉式部評を中心に——』（『むらさき』第六輯、一九六七年十一月）。石坂妙子『和泉式部と紫式部の「文」——『紫式部日記』小論——』（『平安期日記の史的世界』新典社、二〇一〇年。礎稿の初出は二〇〇三年）。

注5 福家俊幸『『紫式部日記』いわゆる三才女批評の位相』（中野幸一編『平安文学の風貌』武蔵野書院、二〇〇三年）。

注6 今西祐一郎『おほけなし』から「けしからず」へ——『浮舟』的状况——（『国文学 解釈と教材の研究』第一七巻第一五号、一九七二年十二月）。

注7 山本利達『和泉はけしからぬかたこそあれ』（『紫式部日記攷』清文堂出版、一九九二年。礎稿の初出は一九七八年）。

注8 増田繁夫『紫式部と清少納言』（『国文学 解釈と鑑賞』第六九巻第八号、二〇〇四年八月）。

注9 梅野きみ子『紫式部の「えん」——『源氏物語』を中心に——』（『えんとその周辺』笠間書院、一九七九年。礎稿の初出は一九七三年）。

注10 梅野きみ子『紫式部日記』の「えん」（前掲注10書所収）は、

注11

「えん」を「紫式部が最も意を用いた美の世界のキーワード」と規定する一方で、「女性の『えんがる』は高く評価されていない」とし、当該箇所を通説に従って解するが、「艶がる」と「艶になりぬる」を同義とみなす根拠は示されず従えない。

『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。

注13 関根慶子「紫式部日記評釈・四 和泉式部・赤染衛門・清少納言」（『国文学解釈と教材の研究』第二巻第六号、一九五七年五月）。

注14 本例は「趣味性が過度にある」（石田穰二・清水好子校注『新潮日本古典集成 源氏物語』新潮社、一九七六年）のように否定的文脈で解される場合があるが、「なくてもよかるべし」との文辞に鑑みて、「趣味方面にたしなみが深い」（玉上琢彌『源氏物語評釈』角川書店、一九六四年）と肯定的に解するのが正しい。

注15 森本元子「一条朝の才女たち——紫式部日記清少納言評再考——」（『古典文学論考 枕草子 和歌 日記』新典社、一九八九年。礎稿の初出は一九八六年）。

（おかだ たかのり・九州大学大学院人文科学研究院准教授）